安藤俊雄著

『天台学論集』

――止観と浄土――

新田雅章

天台大師智顗の教学思想は教観二門を兼備し、その教学的基盤は広くかつ深い。実相の当処の透徹した説明に加うるに、それの観得に途を開く観法をも指示し、綜合的に体系化された教説を呈示してみせる。それだけに智顗につながる学系は、中国佛教史上大きな流れを形成する。しかもその展開は佛教思想の他の系譜の動向と絡みつつ、幅広い様相を呈しもする。智顗を去ること時間的隔りが拡大すればするほど、系譜的に元来智顗にはみられなかった異質な教学思想が天台の系統に潜入し、天台思想の教学的基盤に幅の広さを与えることとなるのである。かくて天台学の研究には自ら豊かな学問的素養が要求される。本書の著者故安藤俊雄博士はまさにそうした条件を満たしておられた学者である。博士が中国天台を中心として、佛教学の広汎な領域に亘る数多くの研究成果を遺されえたのも、幅広い学問的素養と鋭い洞察力に負うところ大きい。

本書は安藤博士の遺稿を編集した遺稿集である。「序」および「あとがき」に明記されているように、本書には、博士畢生の研究課題でありながら、これまでにその研究業績のまとまった発表のなかった天台浄土教に関する論文が収められる一方で、禅思想および止観に関連の諸論文、それに多年に渉る博士の学問的関心の中心をなす天台実相論に関係の論文が収録されている。本書の体裁は、量的に圧倒的に大きく、内容的にも独自の構想をもって書かれている「観無量寿経疏妙宗鈔概論」を別出の上第一部として組みこみ、他の十篇の論文をそれぞれの取り扱われている内容の時代的順序にしたがって配列して第二部に位置づける、というかたちからなっている。本書に収められた論文はいずれも専門的課題を扱った研究論文ばかりであり、これらを通読すれば、博士の学問的関心の所在とその具体的成果を的確に理解することができるであろう。

第一部「観無量寿経疏妙宗鈔概論」は天台宗第十四祖、四明知礼の著『妙宗鈔』の内容概説を通じて、知礼の浄土教の解明を狙いとする。筆者は知礼の浄土教の特質を㈠生佛不二、㈡理観の念佛、㈢本性弥陀・唯心浄土の教学思想の三点にみいだし、そうした特質を七章にわたって詳細に論じている。まずはじめに『妙宗鈔』の撰述の動機を尋ね、それが、指方立相の西方浄土の教説と称名念佛の教えを掲げ、当時大きな影響力を示しつつあった善導系浄土教を意識してのものであったことを明らかにしながら、知礼浄土教の核心へと迫る。筆者によると、知礼浄土教の構造的特徴は、佛の依正を心外の実在とはみず、衆生と佛とを本質的に一体と見做す人間観を背景に、佛を自己の心性に本具せるものと観じ（約心観佛）つつ、弥陀を他なる佛と

してではなく、自己の修行の果徳を示すものと自覚する（是心是佛）ところにみいだされる、という。こうして知礼において弥陀を念ずるいわゆる念佛が、外なる佛の念想としてではなく、内なる佛を観ずるという形式、すなわち観心の形式をとってあらわれるにいたった理由が明らかにされる。しかも筆者は、この念佛が法・報・応の一体三身の弥陀の相好を念ずるよりも、それの尊特相の本質である無縁の慈悲の内容をなす即空即仮即中の一境三諦の理を観ずるものでなければならないと考えられている点を明確にする。こうして、一境三諦の理の徹見を目指す観心の念佛が、それを果しえて、迷いから悟りへと行者を導き入れ、そこに自己の本性が実は弥陀であり、さらに一境三諦の理をみてとった自らの主体的ありかたがまさに浄土そのものである、との宗教的確信が成立する関係が論究されてゆくのである。筆者は、生佛不二の思想を根拠に、理観の念佛、本性弥陀・唯心浄土の思想教学を構想し、それによって善導の浄土教に対抗しようとした知礼の浄土教の特質をみごとに描き上げている。

第二部の最初の論文「東晋佛教学における浄土の理念」は東晋末葉までの中国におけるいわゆる佛教受容期の浄土教の形成の動向を教学的な観点から明らかにしたものである。筆者はこの時期の佛教の動向を示す資料の乏しさを十分考慮して、まず浄土教関係諸経典の訳出の経過を整理し、そこに、般若学を基軸として成りたつこの時期の浄土教学の一般的性格を推定する。ようやく直接資料にあたりうるようになる東晋の佛教について、筆者は慧影の『大智度論疏』や道綽の『安楽集』を手掛かりに、この時期の浄土教学の組織的な確立に途を拓いた人物として符泰の釈道安をあげる。そして彼の浄土観が、弥陀の浄土を最重視するその後の道綽や善導のそれとは異なり、『般若経』の理解と、安世高禅学の業報と生天の思想からの影響とによって導きだされた兜率浄土の信仰を骨子とするものであったにちがいない、との推定を下す。浄土の内容にちがいはあっても、理想世界としての浄土の存在に注意を促す道安の主張は、その後の中国における浄土教の発展に先鞭をつけたものとして注目に価するとの見解がのべられてもいる。

つぎの論文「廬山慧遠の禅思想」は直接には慧遠の禅思想の解明を目的としつつも、彼の教学思想の内容的特徴およびその歴史的意義の解明、さらには羅什を中心とする長安佛教の動向の究明をも狙いとする論文であり、内容豊かである。慧遠の教学思想のなかに占める禅思想の比重の大きさを見通した上で、筆者は彼の禅思想が中国禅思想の二大潮流を形成してきた安世高系の小乗禅と支讖系の大乗禅との統合体として立ちあらわれた関係を明らかにする。ただし彼における両者の統合は、見佛の神秘的体験を重視する小乗禅により傾斜しており、羅什系において重視された、無漏の正智たる般若の体得を導く般舟三昧の性格は彼においてほとんど顧みられてはいないと論ずる。筆者は慧遠の禅思想のなかに、般若思想を強く掲げて広範な浸透をみせはじめた羅什系大乗思想に触れて苦悩する小乗系廬山佛教の動揺をみてとるのである。

「智顗の実相論」。これは天台智顗の思想教学が構造的に有するすぐれて組織的体系的な特徴を実相の捉え方のなかにみいだし、彼において了解された実相の内的性格を、二諦論さらにそれから発展的に展開する三諦論にしたがって構造的にえぐり出す狙いをもって書かれた論文である。はじめに実相の基本的性格が概観され、そのあと二諦、三諦にしたがってさらに突込んで吟味されてゆく。二諦、三諦にしたがって実相を示せば、筆者の説くところ、それは二にして而も不二なる円融相即せる真俗二諦として表示されうる境であり、また相互に円融する空・仮・中の三諦として表詮されうる境界以外のなにものでもない。かくて筆者は、実相が有無の対立を超え、「存在の全体的本質と現象を自らのうちに統一する」もののゆえに、それを円融せるもの、絶対的なもの、全体的なもの、弁証法的なものと呼ぶ。多年に渉る筆者の智顗の実相論研究の特質がよくあらわれた論文である。

続く論文「性具説の根本精神」では、人間存在のすべてが自らのもっとも否定的なありかたとしての地獄の性から、理想態としてつねに希求される佛性にいたるまでの十種のありよう（十界）を内に具している事情を明かす性具説の構想された動機を尋ねながら、その教説の内容のより的確な理解をうるための努力が払われている。筆者は、その動機を、修道を無視して安易な現状肯定に堕する世間主義と堕落しきった教団に対する批判にみいだし、性具説が厳粛な修道精神の昂揚と熱烈な教団改革を意図して構想された教説であることを明らかにする。性具説という一つの教説の形成なりその意味内容を時代的な諸状況との関連のなかで解明しようと企図する筆者の態度には、啓発されるところが多い。なお本論文には直接の関係はないが、智顗の性具説の理解に深いかかわりをもつ『観音玄義』の扱いについての評者の素朴な疑問をのべておきたい。筆者は多年に渉り『観音玄義』の智顗撰述説の論証に努めてこられた一人である。それにも拘らず評者にはこの種の問題の説得力ある解答がいまだ与えられていないように思われてならない。「修悪」「性悪」といった概念を創作して性具思想の明快な説明を展開する『観音玄義』の論調は、たしかに三大部所説の性具説関連の文言に内容的に接続する意趣を含意している。しかし両者を対比してみると、『観音玄義』に用いられる「修悪」「性悪」といった概念はあまりにも概念的に整理されすぎた感を与え、それだけに『観音玄義』と「三大部」との同一作者による撰述に疑問を挟みうる余地を残しているように思われる。ともあれこの種の問題をめぐる検討は今後もなされねばならないのではあるまいか。ただし『観音玄義』の作者いかんに拘らず、性具説が智顗の教学思想を特徴づける教説であることは、何人も否定できない。

つぎの「法華経と天台教学」は数多く存在する法華経釈のうち、智顗の法華釈に最優位性を認め、そしてそうした認定が決して間違いでない事由を明らかにしながら、智顗の法華釈の内容を簡明に論述したものである。智顗の法華釈に最優位の位置が与えられておかしくない理由は、筆者によれば、複雑な内容

からなり経の本意の不明確な『法華経』の経意を、体系的統一的に明示してみせる点で、智顗の法華釈に勝るものがなく、また、経の極意の証得というこれまただれもがなしえなかった方法的な問題に関して、観心という方法の提示によって智顗のみが実に見事に応ええた、といったところにあるという。こうした筆者の論旨は勿論支持されるべきであるが、ただ『法華経』が内容的に捉えどころのない側面を内包しているために、経意の理解なり、観心という行の方法の提示にあたり、智顗において『般若経』なり『中論』さらには『瓔珞経』『華厳経』等の各種の典籍が十分に参照されていることも看過されてはならない。

「天台仏身観の主体的性格」。ここでは、まず仏が内容的に法・報・応の三身にしたがって理解されて間違いではないものの、仏の真実相に照らしてみれば、その三身は三身即一身というかたちで、相即の関係において捉えられるべきである、との智顗の独自の仏身観が明らかにされ、そのあとそうした仏身観の成立の背景に三諦円融思想が働いている事情が論究される。そしてさらに、こうした仏の真実相は観心においてはじめてもっとも明確に把捉されうる、との主体的な仏身観が智顗において構想されていることが明示されている。智顗の仏身観を智顗思想の基本との関連のなかで明らかにした論文として益多い。

このあとに続く論文「治病としての天台止観」は、智顗の止観の法がたんに宗教的行法としての実践法にとどまらず、すぐれて医学的な関心を背景に創説された綜合的な行法であることを明らかにしつつ、その医学的側面を体系的に整理して論じた注目を引く論文である。円融の妙境の観得を究極の目標とする止観の行は、当然にその目的の達成の過程に障害として現出する病の問題を避けて通ることはできない。こうして智顗においては病の問題がその原因および対治の方法を尋るかたちで究明されるわけであるが、筆者はこうした側面に関する智顗の説明を項目別に整理してまとめ上げつつ、さらに智顗の医学的知識の構造的な特徴を明確にしようと努める。筆者によると智顗の医学的知識は仏教医学と漢方医学の綜合としての性格を有するとされる。すなわち、四大五蘊の結合によって生ずる縁起生の身体は、そのために生死の必然性から自由でありえず、したがって久遠常住の法身の観得を可能にする智慧の獲得こそ治病の理想でなければならない、と解する仏教医学を基礎に、一方で陰陽思想や不老長寿を希求する神仙思想を軸に豊かな展開をみせる漢方医学の知識をも十分に摂取したところに成りたつのが智顗の医学的知識の特徴である、という。また筆者は、肉体的疾患と精神との密接な相互関係をみる智顗の医学的知識のなかに、現代の精神病理学に連なる内容を読みとり、その内容の豊かさを評価してもいる。筆者によって開拓されたこうした側面からの禅思想の研究はこれからも様々の角度からなされてよいであろう。

「雲川仁岳の異議」。これは、四明知礼との訣別、山外派の教学思想への接近という軌跡を歩んだ仁岳の思想的転換の理由の解明を狙いとする。筆者は、知礼のもとからの仁岳の退去が、

伝えられるような観心観佛の原理についての知礼と彼との間に生じた理解の違いという単純な問題から発したのではなく、知礼の教学の根幹に対する疑問から生まれた事情を明らかにする。すなわち、知礼の性悪説に潜む悪の実体論的な理解とそれから生ずる倫理的問題に対する仁岳の疑義が、原因の最大のものであったといわれる。筆者は、この疑問が仁岳をしてやがて、実相の真精妙元にして性浄明心なるさまを説く一方で、煩悩を客塵と解し、無明染法の現実の根源的生起についての思弁を行おうとしない『首楞厳経』への親近感を抱かしめ、それが契機となって、さらに理総事別の華厳的な教学思想への接近、とりもなおさず山外派への傾斜へと導いていった、と転換の経緯を説明する。ここでの筆者の説明は明快で、かつ鋭い。またここでの論述は、天台、華厳両思想の絡み合う宋代の佛教界の入り組んだ思想的動向をも浮き彫りにしてみせてくれて興味深い。

続く「恵心僧都と四明知礼」は源信を中心とする日本天台の学僧たちと知礼を頂点とする中国天台の指導層との交渉を扱った論文である。相互にとりかわされた著述や質疑、答釈等を克明に拾いあげ、交渉の事実関係を明らかにする。とりわけ山外派の源清の『十六観経記』に対する源信の破文とそれへの源清の破文、および知礼に対する源信の二十七条からなる質疑とそれへの知礼の決答の内容を紹介し、交渉の経過を内面から照らし出す努力が払われ、天台教学の核心に迫ろうとする両国の天台学僧の真摯な姿が明らかにされる。最後に『往生要集』の四明浄土教に対する影響の有無が問われ、山外派の異義と対抗し、純正な天台義の確立に追われた知礼に『往生要集』の影響が認められずとも不思議ではない、との見解が示されている。

第二部最後の論文「俊芿律師と趙宋天台」は、円密戒浄の諸宗に通じ、『楽邦文類』の将来者としても著名な、鎌倉期の傑出せる学僧、俊芿法師の教学的基盤となった天台教学の理解の特質の解明を狙いとする。筆者はこうした作業を、俊芿自身の体系的な著述が残存しないために、彼が入宋中師事した北峰宗印の著『北峰教義』を手掛かりに推し進める。この方法は、俊芿が『北峰教義』に引用の文章を原本にあたり一々検索して『三千義備撿』をつくり、並々ならぬ北峰への傾倒を示しているだけに、不自然ではない。北峰の教学思想は、筆者によると、山家山外の思想的抗争の延長上にあらわれ、天台義の正しい理解を目指すものであったとされる。すなわち、知礼の性具説を実体論に堕するものと批判した仁岳の性具説の解釈が、一方で三千を俗諦に、心性を一切の差別を含まぬ清浄なる存在と解し、互融の関係に立つはずの心と三千の関係の把握にかえて失敗している点を正しくみてとって表示されたのが、北峰宗印の天台義であったというのである。こうして筆者は俊芿の天台義の正当性を推定する。なお筆者はこのあと、俊芿撰するところの『三千備撿』の校訂したものを附している。

この論集はさきにも記したように安藤俊雄博士の遺稿集である。本書を通読してみると、博士の学問的底辺の広さと理解力の確かさをあらためて痛感させられる。対象とする領域が、南北朝時代という中国における佛教のいわば受容期から、天台智

顕の思想、それから宋代の入り組んだ佛教の動向、さらには日本天台にまで及び、しかも内容的に未開拓の分野での新たな成果を包含している。それだけに学会に寄与するところ大なるものがあろうし、また編集の妙をえているといわざるをえない。

今後はもはや博士の新たな学問的成果の恩恵に浴することができなくなったことが惜まれてならない。

（昭和五十年五月、平楽寺書店、A五版、八、〇〇〇円）